

平成31年度 北海道教育大学札幌校

教員養成課程

私費外国人留学生入試

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 この問題冊子は5ページ、解答用紙は2枚、下書き用紙は2枚あります。
- 3 「問1」「問2」すべてに解答すること。
- 4 解答用紙は、「問1」「問2」それぞれ1枚あります。
- 5 解答は解答用紙に横書きとし、句読点および段落の空白も1文字とし、指定された字数内でまとめること。ただし、題・氏名は記入しないこと。
- 6 受験番号は、解答用紙の指定欄に記入すること。
- 7 解答用紙2枚を提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外は受理しません。
- 8 試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 以下の文章AとBは、スマートフォンを乳幼児に使わせることの是非について、二人の識者にインタビューしたものである。文章AとBを読み、問1と問2に答えなさい。

文章A. NPO法人「CANVAS」理事長・石戸奈々子さん¹⁾の意見

～時代を生き抜く「初めの一步」～

これからの時代に必要な能力は、情報通信技術（ICT）を使いこなす力です。これは国際社会の共通認識で、日本でも 2019 年度からデジタル教科書を使って学ぶ環境が整備され、20 年度からは小学校でプログラミング教育が必修となります。

スマホはタブレットと並んで、ICT を使って子どもの可能性を引き出すのに便利なツールです。親子で一緒に言葉を楽しんだり、興味を持ったモノを調べてみたり、歌ってみたり、踊ってみたり……。私は0歳から息子に iPad を与えていますが、彼は興味を持ったアプリを使い、世界中の言葉で「こんにちは」を覚えました。色々な国の言葉が聞けるアプリだったからこそ探求できた。世界ではいま、表現豊かなアプリが次々に生まれています。海外の文化に触れたり、表現を体験したりするのは子どもたちにとっていい刺激になります。

ベネッセ教育総合研究所が 17 年に行った調査によれば、母親の 9 割以上がスマホを使い、うち乳幼児の 2 割がスマホにほぼ毎日接しています。もはや私たちの生活から、スマホは切り離せなくなっています。禁止するのではなく、大人が寄り添えるうちに適切な使い方を教えるほうが建設的だと思います。

その際は①親子のコミュニケーションの道具にする②自分で創造したり、表現できたりする良質のアプリを使う③使い方や時間などのルールを決める④遊びや学びのバランスを考える、ことを心がけてほしいと思います。スマホは良い使い方をすれば、粘土やお絵かき、ボール遊びと同様に情操教育として意味があります。

ただ、早くスマホを与えた方がよい、と勧めるわけではありません。乳幼児期は家庭環境や発達状況、子どもの関心の持ち方が大きく異なるからです。スマホの使い方や使う目的も様々です。保護者から「何歳から子どもにスマホを与えればいいのですか？」とよく尋ねられますが、「一律の解はありません」と答えています。保護者が自ら学んで判断し、教育方針と照らし合わせて、自分たちのルールをつくるしかないのです。

スマホを「子守に」使うことには批判もありますが、もっと寛容さが必要ではないでしょうか。核家族化や共働きの増加など子育ての環境は昔とは違います。「料理の時に近寄る

と危ないから」「電車内でむずかるから」といった理由でしばらくの間、スマホを与えることくらいいいじゃないですか。親がおおらかな気持ちになれば、豊かな育児にもつながります。乳幼児は色々なものに関心があり、いつまでもスマホに関心が向くことは少ないでしょう。

ポケベル、PHS、携帯電話と私たちの世代は若い頃から ICT に親しんできました。経験を通して利便性と危険性をともに知っており、親になったいま子どもにはバランスを考えてスマホを与えることができます。

ICTの進化で近い将来、いまある仕事の半分がなくなるとされています。いまの子どもたちは、新しい仕事をつくり出す世代になる。必要なのは ICT を使いこなし、世界中の多様な価値観の人たちと協働して新しい価値をつくり出す力と生涯にわたって学び続ける力です。スマホの適切な使い方を教えることが、子どもたちが生き抜ける環境づくりの「初めの一步」になればいいと思います。

(聞き手・日浦統)

注1) 石戸奈々子 1979年生まれ。慶大教授。02年に子どもの創造的な学びの場を設ける「CANVAS」を設立。デジタル絵本作家でもある。

文章B. 日本小児科医会理事・内海裕美さん²⁾の意見

～心身への悪影響、軽く見過ぎだ～

日本社会は、スマホが、子ども、特に乳幼児にもたらす悪影響を軽く見過ぎています。

企業はアプリでかなや漢字を覚えたり、お絵かきもしたりできるなど便利さを宣伝しますが、実際に「子どもの学力が上がった」「幸福感が向上した」といった研究データはあまり見たことがありません。

一方で、小中学生の視力は年々、悪化傾向にあり、昨年調査では過去最悪でした。寝る時間が遅くなり、睡眠時間も短くなる傾向を示すデータもある。幼児どころか中学生までスマホはいらない、が私の持論です。

日本小児科医会は、2013年から「スマホに子守をさせないで」と題するキャンペーンで、育児の現場で安易にスマホを使うことの危険性を訴え続けています。テレビやゲームも子どもの心身の成長に悪影響を及ぼしますが、スマホは次元が違います。ゲーム機で遊ぶのは3歳くらいからですが、スマホは2歳くらいから動画を見られる。親が知らないうちに

スマホで勝手に遊んでいたという例は多い。いつでもどこでも使えるので、接する時間も長くなる。与えられる情報量も膨大になります。

乳幼児期に限ったスマホの影響に関する臨床データはまだありません。しかし、子どもの成長に悪いことが起きていないだろうか、という警戒心が常に必要です。10年後に失敗とわかった場合、その結果は子どもたちが引き受けることになるからです。

親がスマホを与えるのは、むずかる赤ちゃんをあやしたり、家事で忙しかったりする時が多い。動画を見ていると喜ぶので、そのままにしてしまいがちです。赤ちゃんは1人でブルーライトを浴びながら、画面を見続ける。その結果、最近では、親にあやしてもらよりもスマホをくれと泣きわめく「スマホ中毒」の赤ちゃんが出てくるなどの影響が出ています。

乳幼児期は子どもの心の土台をつくる時期で、親子で時間をかけて接触を重ねることが大切です。親が世話したり、話しかけたりすることで、赤ちゃんは「この人は私の命を守ってくれる人なんだ」と信頼を寄せる。同時に、「自分は世話されるに値する人間なんだ」と感じられるようになります。

スマホが大人の「生活必需品」になったいま、育児に一切使ってはいけないとは思いません。スケジュール帳に予防接種の予定を記録したり、じんましんやけいれんなど子どもの病状を写真や動画で撮ったり、子どもを育てる生活の中で活用するのはいいと思います。ただ、育児の効率化が、親の都合による手抜きになっては困ります。乳幼児期に手間ひまかけて時間をかけて誰かに寄り添ってもらふことは、子どもの人格形成に大きな影響を及ぼします。

子どもは3～4歳までには1千～2千語の言葉を覚えます。その過程では、五感を使った直接体験が必要になります。触ったり、なめたり、匂いをかいだり、親から聞いたり…。スマホは便利でひとつの機器でたくさんことができる半面、この直接経験が貧弱になってしまう。言葉に遅れがある乳幼児の親に「スマホを使うのをやめてみたら」と助言すると、活発にしゃべるようになった事例はあちこちの小児科で聞きます。スマホは赤ちゃんが寝てから使うなど、メリハリをつけた使い方が大切だと思います。

(聞き手・日浦統)

注2) 内海裕美 1954年生まれ。97年に父の後を継いで吉村小児科院長に。専門は小児神経、小児保健。子どもとメディア委員会担当理事。

出典:(争論)乳幼児にスマホ、あり? 石戸奈々子さん、内海裕美さん 朝日新聞
2018年7月12日 朝日新聞社に無断で転載することを禁じる。
承諾番号:19-2859

- 問1 文章AとBにもとづいて、スマートフォンを乳幼児に使わせることの長所と短所を、500字以上600字以内でまとめなさい。(100点)
- 問2 スマートフォンを乳幼児に使わせることについて、あなたはどのように考えるか、500字以上600字以内で述べなさい。(200点)